



＜モーセと燃える柴＞ Mosaic in the National Shrine of the Immaculate Conception, Washington

モーセが羊を追って荒野の奥の神の山ホレブに登った時、不思議な光景を見ました。

そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。(出エジプト3:2)

モーセは自分の名前を呼ぶ神の声を聞きました。それはイスラエル人としてのモーセを呼ぶ声でした。

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。(出 3:7-8)

神はイスラエルをわが民と呼び、イスラエルの痛みを知る方として、また、苦難から救い出す方としてモーセに語りかけるのです。神のこの声は、モーセの心の中から拭い去ることのできないエジプトにいるイスラエルの民の苦しみを、神も共に苦しんでいる声でした。苦しむ自分の願いに応えてくれる、希望の声として聞こえたのです。さらに神はモーセに、

今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。(出 3:8)

神の代わりにモーセがその使命を果たすように命じるのです。モーセは神の声を聞いて畏れましたし、神の命令は不可能に思えました。モーセは祈ったことがありませんでした。なんと呼びかけていいのかも分かりませんでした。そして、神の名を問うのです。

神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」(出 3:14)

私たちは主イエスに、「父よ」と祈るように教えられています。旧約聖書の民は、「全能の神」、「いと高き神」、「主」、「創造主なる神」、「主なる神」などと神を呼び、識別しています。「名は体を表す」と言います。苦しむモーセに神自ら現れて、その名を告げました。私たち人間が神を求めて尋ねます。“Who are you?” と。神が“I am.” と答えます。神の「体」が示されたのです。「あなたと私」という、最も身近で、相対する関係で、出会われる方として、神が存在することを示す名前なのです。この時からモーセは、神が彼の苦しみに寄り添い、共に歩む方だと信じました。

主イエスも、十字架と復活のイエスに出会った時、このことを知ると告げました。

「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。(ヨハネ8:28)

神の山ホレブでのこのシーンは古代のゾロアスター教の「光」(善)の象徴としての純粋な「火」を尊ぶ形と非常によく似たものです。モーセの時代にも、当時の他の宗教から感化されています。しかし、モーセは神を、概念ではなく、人間に「人格をもって迫る方」として受け止めています。